東京衛生試験所長・中浜東一郎の公務出張

内田正夫　所員／総合文化研究所

明治 24 年（1891）8 月 18 日、イギリス船にコレラ発症との電報が長崎から東京衛生試験所に入った。中浜は役所から帰ると大急ぎで旅装を整えて、夜 9 時 50 分新橋発の列車に乗った。東海道線はこの 2 年前に神戸まで全線開通していた。鉄道の旅 20 時間 20 分で、翌日夕刻 6 時 10 分神戸に着。旅店常磐舎にて小休の後、加茂川丸にて出帆、翌 20 日夜 11 時馬関（下関）に着。翌朝 7 時福岡着。9 時に抜錨して、午後 11 時半に長崎港に到着した。神戸から 2 日と 2 時間半、東京から丸 3 日の旅であった。

中浜東一郎はこの年、34 歳。4 月から東京衛生試験所長に着任した。東一郎の父はあのジョン万次郎＝中浜万次郎である。天保 12 年（1841）土佐中ノ浜の漁師の万次郎は仲間 4 人とともに嵐で流されて無人島に漂着、アメリカの捕鯨船に救助された。万次郎はアメリカで教育を受け、嘉永 4 年（1851）、日本に帰国を果たした後、土佐藩に仕え、幕府に出仕した。ペリー来航時の通訳や咸臨丸の太平洋横断航海など、幕末から明治にかけての激動期にアメリカ事情に通じた者として活躍した。

長男の東一郎は安政 4 年（1857）の生まれ。明治 6 年（1873）大学東校に入学、東京大学医学部発足後の明治 14 年（1881）第三期生として卒業した。30 名の同期卒業者には森林太郎や小池正直らがいる。卒業後、東一郎は福島県立医学校長、岡山県病院医師同医学校教諭、明治 17 年（1884）石川県金沢病院長兼医学校長として勤務した後、明治 18 年（1885）内務省御用掛となり、ドイツに留学（1885 年 10 月～1889 年）して、ライプチヒのホフマン、ミュンヘンのペッテンコーフェルのもとで衛生学を学んだ。明治 22 年（1889）帰国後、内務省衛生局東京衛生試験所の技師となり、明治 24 年（1891）から所長に任ぜられたのであった。各地にコレラ等の感染症や食中毒が流行するたびに調査や県衛生当局への助言のために出張し、また医師開業免許試験実施などのためにも各地へ出張した。こうして公衆衛生制度の確立されはじめた時期にその実施をになった人物である。明

治 29 年（1896）まで同所長を務めたが、この年退職して官を辞し[1]、明治生命保険会社の審査医長、のち日の出生命保険会社の医長となって、生命保険というこれも社会の健康保持のための制度作りの基礎的な仕事をなし、明治 37～昭和 4 年にわたって保険医協会会長を務めた。

中浜東一郎は 34 歳の明治 24 年（1891）から亡くなる昭和 12 年（1937）まで筆まめな日記を遺した。子息の中浜明氏によって編纂された『中浜東一郎日記』[2]は日本の近代的公衆衛生行政形成期のありさまを示す一次史料として価値が高いとされるが、この日記を公務出張でしばしば旅行した百余年前の高級官僚の旅行行程を示す史料として、旅日記の視点から読んでみるのも興味あることと思われる。「旅日記」は必ずしも観光や巡礼ばかりでなく、旅にはさまざまな目的、さまざまな形態があるものであるから、近藤家文書に見られるビジネス旅行や中浜の公務出張の日記もさまざまな「旅」の形態のひとつとして旅日記研究の一史料となると思うのである。中浜日記は旅行の記録を意図して書かれたものではないが、衛生試験所時代の彼は各地へたびたび出張し、一年の半分以上を旅に過ごしていた年もあるほどだったので、日々を記録した日記はすなわち旅日記となっているのである。本稿では中浜の長年の日記のうちから、第 1 巻はじめの部分の明治 24～25 年（1891～92）の日記からいくつかの出張旅行の日程を取り出してみることとする。

①明治24年（1891）8月18日～9月8日　コレラ流行の調査と助言のため長崎へ出張、22日間。
②同年、10月31日～11月10日　濃尾地震被災地調査と助言のため出張、11日間。
③明治25年（1892）4月6日～5月23日　医術開業免許試験のため長崎と京都へ出張、48日間。

これら明治 24 年（1891）からの継続的日記以前に、『日記』第 1 巻冒頭には若い頃の旅行日記数編が収められていて、そのうちつぎの④と⑤の二編は人力車や駕篭、内陸の川船行、沿岸航行など、鉄道網開通以前の明治時代最初期の旅行の形態を示しており、明治期後半の旅行と比較して興味深い。

④明治 7 年（1874）東一郎17歳　「越後紀行」　父万次郎が新潟の平野氏に面会の用があって旅行。それに随行した。
⑤明治 8 年（1875）東一郎18歳　「土佐紀行」　父万次郎とともに郷里の高

1）官を辞した原因には衛生局の人事やペスト菌発見を中浜が批判したことをめぐる北里柴三郎との確執などがあったらしい。土屋重朗著『鷗外をめぐる医師たち』戸田書店、1998 年、83-97 頁。
2）中浜明編『中浜東一郎日記』全 5 巻、冨山房、1992-1995 年。

知、中ノ浜へ旅行。老母に孫（東一郎）の顔をみせるとともに、高知の家屋売却のため。

ここでは①～④のみ紹介する。

1―― 長崎、馬関のコレラ流行の調査と助言のため出張

経路概要：東京（新橋）（明治 24 年〈1891〉年 8 月 18 日発）→神戸→長崎→馬関→大阪→京都→東京（9 月 8 日帰着）［旅程表 1］

本稿冒頭に記した丸 3 日の旅の後、8 月 21 日深夜長崎に着いた中浜は翌 22 日県庁を訪れ、中野知事、中村書記官らに面会、女神消毒所、コレラ患者の出たイギリス船を視察した。夜 9 時、船舶入港の知らせにより雨中を消毒に赴く。翌 23 日には知事からの接待を受けた。24 日、午前 5 時横浜丸の消毒を実見す。午後 6 時赤間関（下関）に患者発生との報を受けるが、便船既にないためすぐには赴くことができず、翌 25 日も長崎にて貧民家を視察、培養基等の検索用品の購入を指示するなど活動した。

夜 11 時港川丸にて長崎を出航、翌 26 日朝 9 時 40 分博多へ到り、即刻汽車にて門司に 1 時 10 分着。小汽船にて馬関に到る。奥田医師と出会。患者多発地区を視察。患者発生状況を内務省へ電報（総数 23 人、死者 12 人等）。下泄物の培養

旅程表1　明治24年（1891）8月18日～9月8日　コレラ調査と助言のため長崎へ出張

月　日	発着地/滞在地	出発日時	交通手段/宿	到着日時	経由地その他
8月18日	新橋駅→神戸	18日21:50	鉄道（東海道線）	19日18:10	東京から20時間20分。 常磐舎（旅荘）にて小休。
8月19日～21日	神戸→長崎港	19日21:00	加茂川丸	21日23:30	多度津、馬関、福岡、松島を経由
8月21日～25日	長崎滞在		この間、緑屋泊か		県知事ら面会、接待、船舶消毒、市役所（おそらく消毒等の打ち合わせ）、貧民家視察など。
8月25日～26日	長崎→博多 博多→門司 門司→馬関	25日23:00 26日09:40 26日13:10過ぎ	港川丸 汽車 小汽船	26日09:40 26日13:10 26日13:00過ぎ	 渡船はすぐ
8月26日～9月4日	馬関滞在		この間、福田屋旅館に泊、31日いくらやへ移動。		患者多発地区視察、市長・助役らに予防法講演。船舶消毒、避病院巡視、培養基検索など、医師会にて講演会、予防法助言。市長の接待を受く。
9月　4日～6日	馬関→和田岬	4日23:00乗船 5日01:00出帆	船	6日03:30	多度津経由。
9月　6日	和田岬→大坂	6日13:00	汽車		6日午前消毒所、避病院視察、午後大坂へ、衛生試験所長訪問。大坂泊。
9月　7日	大坂→京都	7日10:00	汽車		黒谷、金閣寺等見物。
9月　8日	京都→新橋	8日00:30	鉄道（東海道線）	8日17:30	京都新橋間17時間。

試験をおこない、夜10時市役所において市長、助役、参事員等を集めて、隔離法や消毒法など目下の予防法を述べる。油浸顕微鏡がないので大坂衛生試験所から取り寄せることになった。「大多和属（しょく）」（同行者に関する後述をみよ）は山口の吉田医学士がそれを持っているので借りようという。27日市会で演説、午後船舶消毒、避病院、消毒所を巡視。28日から9月3日も同様に巡視、消毒法等を指示、患者発生家屋や隔離所の清潔、給食、便所、行水などを現場で指示。市会では海港の検疫、上下水の整備、コレラ対策費用をあらかじめ決議しておくことなどを解説した。

9月4日晩、市長らの接待を受け、夜11時乗船、午前1時出帆した。瀬戸内海を航行し、多度津を経て9月6日午前3時半、和田岬（神戸）に到着。午前、見張り船に赴き、消毒所、避病院等巡視。午後1時汽車で大坂へ赴き、大坂衛生試験所長を訪ね、夜一献。

9月7日午前10時大阪発、京都金閣寺等を見て、夜半12時半の汽車で帰京の途に就き、翌8日午後5時30分新橋着（京都から約17時間）。以上のように公衆衛生行政の係官として精力的に活動した。

この①と次の②の長期出張の間にも、
○9月18日～19日　横浜でコレラ発生、調査と助言のための短期出張、2日間、
○9月29日～10月4日　高崎で食中毒、調査と助言のため出張（6日間）がある。

2 ── 濃尾地震被災地調査と助言のため出張

経路概要：東京（新橋）（明治24年〈1891〉年10月31日発）→岡崎→名古屋→岐阜→四日市→名古屋→岐阜→名古屋→東京（11月10日帰着）［旅程表2］
（名古屋を中心に一ノ宮（一宮）・岐阜方面へ二回り巡回）

明治24年（1891）10月28日早朝地震で目を覚ました。濃尾地震である[3)]。鉄道も電信も被災して被害の詳細が東京に伝わるには時間がかかった。翌29日内務省秘書官や土木技師が出発した。3日後の10月31日横浜衛生試験所長辻岡精輔らと協議し、出張が決まった。

午後9時50分の汽車で出発。「缶詰（牛）1個、ビスケット1、コルントビーフ2個、コンテンス乳1個」を携帯食料として持参。車中知り合いの侍医らと出会。汽車は岡崎（名古屋まで約35キロ）で停まった。馬車で迎えがあったが、中浜は人力車で独行した。名古屋市内熱田に至るとほとんど全家屋が倒壊してい

3）濃尾地震は1891年10月28日6時39分に発生。岐阜県本巣郡を震源とするマグニチュード8.0の観測史上最大の内陸直下型地震で、死者7200余、全壊14万戸の被害を出した。

た。青柳楼に投宿。夕食後、熊谷病院長を訪う。余震が続いていた。

11 月 2 日名古屋を発して一ノ宮（帝国大学お雇いドイツ人教師（外科医）スクリバに出会）を経て岐阜、玉井屋に投宿。同宿には総理大臣一行止宿。翌 3 日、罹災地、墓地、焼き場等巡見。4 日大垣へ向かい、落下した鉄橋、監獄、郡町役場、警察署を訪れる。関ヶ原に一泊するが、「蓋し当地に泊すべき家なし」。5 日関ヶ原から汽車で大垣へ、夜船にて揖斐川を桑名へ下る（上等 25 銭）。6 日黎明桑名着、人力車で四日市へ、午後 2 時汽船に乗って名古屋に戻る（上等 35 銭）。

11 月 7 日名古屋を発して一ノ宮に至って泊。旅宿は破れ屋で、鉄道修繕の人夫が泊まっており雑踏。「夜食の椀の物を食せんとせしに蒲鉾小切の食ひ掛け一片あるを発見。不潔可思（ふけつおもふべし）。」中浜の旅行中の日記に行程や業務以外に感想が書き込まれるのはほんの僅かである。たまにあるそれが船車室内や宿の清潔に関する事項であった。

11 月 8 日一ノ宮を発って、知人の医師を 2 人訪ふ。地震以来ひとりは約千人、ひとりは三百人を治療したという。午後 3 時岐阜発、8 時名古屋着。9 日、愛知病院、県庁を訪れ、岩村知事らに会う。夜 7 時岩村宅にて夕食、知事宅に一泊。11 月 10 日、午前 8 時 20 分名古屋発、午後 9 時 45 分東京着（名古屋岡崎間がすでに復旧していたということ。鉄道にて 13 時間 25 分）。

旅程表2　明治24年（1891）10月31日～11月10日　濃尾地震被災地調査と助言のため出張

月　日	発着地/滞在地	出発日時	交通手段/宿	到着日時	経由地その他
10月28日朝	地震発生				内務省秘書官、土木技師ら岐阜へ出発。
10月31日	新橋→岡崎	31日21:50	鉄道（東海道線）		岡崎から名古屋は不通。
11月 1日	岡崎→熱田		人力車		馬車で迎えがあったが人力車で独行。
	名古屋泊		青柳楼に宿		夕食後、熊谷病院長を訪う。余震3，4回。
11月 2日	名古屋→岐阜	2日早朝			玉井屋に投宿
11月 3日	岐阜滞在				罹災地、墓地、焼場等巡見
11月 4日	岐阜→関ヶ原				監獄、郡町役場、警察署を訪れる。 泊すべき家なし。
11月 5日	関ヶ原→大垣		汽車		
11月 5日～6日	大垣→桑名	5日夜	船	6日黎明	揖斐川を船で下る（上等25銭）
11月 6日	桑名→四日市		人力車		吉倉に投ず（旅荘で休憩）
	四日市→名古屋	6日14:00	汽船		上等35銭。人力車にて田原屋に投宿。
11月 7日	名古屋→一ノ宮		人力車か		中村と称する破れ家に投宿。 蒲鉾の食い掛け、不潔思うべし。
11月 8日	一ノ宮→岐阜		人力車か		途中笠松にて井上の仮病院訪問。
	岐阜→名古屋	8日15:00	人力車か	20:00	名古屋着。
11月 9日	名古屋滞在				好生館、愛知病院、県庁訪問。 知事と会う。知事宅に泊。
11月10日	名古屋→東京	10日08:20	鉄道（東海道線）	21:45	名古屋新橋間13時間25分。

3 —— 医術開業免許試験のため長崎と京都へ出張

経路概要：東京（新橋）（明治 25 年〈1892〉年 4 月 6 日発）→名古屋→大坂→岡山→尾道→馬関→博多→嬉野→長崎（14 日着、26 日まで長崎滞在）→福岡→久留米→京都（京都滞在）→次女栄危篤の電報により一度帰京（5 月 9 日着）、5 月 14 日東京発→京都→東京（5 月 23 日帰着）［旅程表 3］

中浜はこの年、試験委員長代理として出張。4 月 6 日朝 6 時の汽車で出発、名古屋に 18 時過ぎに着いて知人と夕食、名古屋泊。翌 7 日は、濃尾地震で長良川鉄橋が落ちて以来鉄道不通のため四日市まで迂回。中浜日記には迂回の理由についてなにも言及がなく、さも当然のようにこの経路が記載されている。経路は、熱田まで人力車、熱田から四日市まで汽船で迂回し、四日市から大坂まで汽車、大坂中之島洗心館に投宿。知人来訪。翌 8 日午前諸氏に面会し、12 時発の汽車で岡山へ。岡山で知人石津氏に会い、石津氏宅に泊。9 日は諸氏に会い、夕 19 時の汽車で 22 時過ぎ尾道に着、尾道泊。4 月 10 日朝 7 時半汽船防長丸にて三原、呉を経由して翌 11 日朝 7 時馬関に到着。「上等 3 円 4 銭なりと」、「防長丸、船大なれとも掃浄不行届なり」の感想。11 日は馬関に滞在して大多和ら知人、関係者来訪。夜 21 時 40 分に正吉丸で馬関を発し、翌 12 日 3 時 30 分に博多着。「此の船は長大、美麗、食堂広くして美、清潔」の感想。1 円 80 銭。12 日博多で東京神田の大火（4 月 10 日）の報を聞いた。電報で知人の安否を問う。13 日長崎行きの便船がないため、陸路で長崎へ向かうこととし、佐賀まで汽車、嬉野温泉まで人力車で行って旅宿塩屋に泊。不潔で不快。人力車賃は二人挽きにて 1 里あたり 20 銭前後で、佐賀から彼杵まで延べ 15 里で 2 円 80 銭。14 日朝 7 時嬉野を発ち、彼杵から小汽船で 10 時 25 分発、時津に 13 時 30 分着。人力車で長崎に到着した。東京から長崎まで 9 日を要している。長崎への出張といっても途中の名古屋、大阪、岡山、馬関等で数多くの人々と会って、おそらく公私の交流・情報交換の機会としたのであろう。

4 月 15 日から 25 日まで長崎に滞在して筆記試験ついで実地試験を実施、出願者延べ 433 人、及第者 50 人。25 日県庁内にて及第証書授与。4 月 26 日正午の出航予定が延び延びとなって 24 時に正吉丸出帆、27 日午前 11 時に福岡着。1 時 32 分の汽船（汽車）で久留米にて降車。二人挽き人力車で吉井にて泊。「田舎の旅人宿……不快なりし。蚤の為に安眠するを得す。」（泊料上等 28 銭）。4 月 28 日石井村に樋口氏さらに森氏を訪れ、多数の患者を診察、樋口方に一泊。4 月 29 日 5 時 30 分石井を発し、11 時 5 分久留米に戻る。二人挽きでたいへん速かった。1 時 19 分の汽車で発し、5 時 30 分門司に達す。新八幡丸に乗船、夜 12 時発船。（門司神戸間上等別室 4 円 80 銭余）。4 月 30 日午後 7 時多度津経由、5 月

1 日午前 6 時半神戸着、汽車で大阪に至り、洗心館に投宿、友人とともに奈良へ行く。奈良泊。5 月 2 日大坂に帰る。5 月 3 日京都に至り、麩屋町俵屋に投宿。5 月 4 日〜8 日、京都に滞在し、試験実施。

5 月 8 日夕刻自宅より次女栄急病との電報。直ちに午前零時 20 分の汽車で帰京。9 日午後 5 時 30 分東京着。11 日不眠の看病むなしく午前 5 時 10 分栄死亡。12 日埋葬。13 日大いに疲労。14 日にはあわただしく午前 11 時 40 分の汽車で京都へ発つ。15 日午前 5 時京都着。試験。16〜18 日友人知人等と過ごす。19 日府庁内にて及第証書授与。5 月 20 日大日本私立衛生会京都支会開催。21 日嵐山に遊び、午後 4 時過ぎの汽車にて京都を発し、10 時過ぎ名古屋に着、青柳に投宿。22 日午前名古屋を発し、豊橋に下車して新藤、鈴木の二氏を訪ふ。興津泊。5 月 23 日午後 4 時頃東京新橋に帰着。

出張の同行者はあったか？

このような高級官僚の出張には必ずや下僚または事務官が随行していたものと推測するのだが、日記の中にそれとおぼしき人への言及は見あたらない。旅行費用の経理や船車宿所の予約、訪問先や来訪者との連絡、本属署への報告など、また帰京後には復命書の作成もあるので、事務官の同行なしとは思えない。旅先で面会した人々については委細に記録しているが、同行者への言及がないのは、ほんとうに単独行だったということだろうか。

たしかに上述の日記には、濃尾地震出張や免許試験出張の中で、部分的に船車料金や人力車夫との料金交渉の記事もあるので、あるいは部分的に単独行動のこともあったかもしれない。しかし、次のような事例から筆者は、基本的にはただ書かれていないだけであろうと推測する。

翌年の明治 25 年（1892）3 月 16 日には消毒所移転先の現地視察のために横須賀・馬堀・根岸へ日帰り出張している。この行の同行者は石黒忠悳、高木兼寛の両軍医総監、帝国大学教授三宅秀、済生学舎塾長長谷川泰、塚原艦船局長、中溝少佐といった錚々たる人士であった。医療行政の最高官位にある人々が打ちそろって出かけたのだから、事務官はもとより副官から警護官まで、大名行列のごとく多数の随行者がいたはずである。しかし、中浜日記に言及されている随行者は唯一「坂部書記官」一人のみである。その他の事務官や下僚についてはまったく言及がない。①の長崎馬関出張ではたびたび荒川衛生局長との間で報告や指示の電報を送受しているし、試験器具や油浸顕微鏡の手配などを「大多和属」が手伝っているが、この「大多和」は東京衛生試験所からの同行者ではない（おそらく馬関の衛生医員）。このような事務的業務や培養試験の準備などは日々こなさなければならず、そうとうに煩瑣だったはずであるので、日記に言及されていないが、おそらくは事務官や補佐医員のような同行者があったものと筆者は推測している。そしてそのような補佐的な業務を行なう人々には私的な日記の中でも言及するこ

旅程表3　明治25年（1892）年4月6日～5月5日　医術開業免許試験のため、長崎、京都へ出張

月　日	発着地/滞在地	出発日時	交通手段/宿	到着日時	経由地その他
4月 6日	東京→名古屋	6日06:00発	鉄道（東海道線）	18:00過ぎ	熊谷氏と夕食。
4月 7日	名古屋→熱田	08:00発	人力車		
	熱田→四日市	09:50発	汽船		
	四日市→大坂	14:00発	汽車		草津経由。中之島洗心館に投宿。 島田氏来訪。
4月 8日	大阪→岡山	12:00発	汽車		午前諸氏に面会。 岡山で石津氏に会い、石津宅に泊。
4月 9日	岡山→尾道	19:00発	汽車	22:00過ぎ	昼間は諸氏に会う。浜吉支店に投宿。
4月10日～11日	尾道→馬関	07:30発	防長丸	11日07:00	上等3円4銭なりと。三原、呉等を経由。 防長丸、船大なれとも掃浄不行届なり。
4月11日	馬関滞在				馬関に大多和ら関係者来たり。昼食等。
4月11日～12日	馬関→博多	11日21:40発	正吉丸	12日03:30着	此船は長大、美麗、食堂広くして美、清潔。1円80銭。林家で一睡。
4月12日	博多				病院や県庁内に設立された試験所を訪問。
4月13日	博多→嬉野		佐賀まで汽車、 佐賀→嬉野は 人力車		船便なくやむなく陸路。塩屋方に止宿。 不潔、不快。人力車賃は二人引きにて1里20銭。佐賀から彼杵まで2円80銭。
4月14日	嬉野→彼杵	07:00発	人力車		
	彼杵→時津	10:25発	小汽船	13:30	
	時津→長崎		人力車		3里、50銭。今町の緑屋泊。 6人会して試験問題選定。
4月15日～25日	長崎滞在				
	15～18日 筆記試験実施				カンニング退場者数名あり。
	20～22日 実地試験実施				医学部の諸教授らの招待を受く。 試験成績発表。及第者50人。 県庁にて及第証書授与。
4月26日	長崎→福岡	24:00発	正吉丸	27日11:00着	正午の出港予定が延び延びとなった。
4月27日	福岡→久留米	13:32発	汽車		
	久留米→吉井		人力車	27日19:20	久留米から7里、1円10銭。 雨のため、此村に一泊、不潔不快。
4月28日	吉井→石井村				樋口氏、森氏を訪ねる。
4月29日	石井村→久留米	05:30	二人挽き人力車	11:05	とても速かった。
	久留米→門司	13:19	汽車	17:30	
4月29日～5月1日	門司→神戸	24:00発	新八幡丸	5月1日06:30	
5月 1日	神戸→大坂	07:25	汽車		大坂洗心館に投宿。
	大坂→奈良	13:30	汽車		奈良武蔵野に投宿、風景佳し。
5月 2日	大坂滞在				
5月 3日	大坂→京都				雨、麩屋町俵屋に投宿。
5月 4日～8日	京都滞在				医術開業免許試験実施。
					8日19:00次女栄危篤の電報。
5月 9日	京都→東京	00:20発	汽車	17:30着	京都新橋間17時間10分。
5月10日～13日	東京				栄を看病、葬儀。
5月14日	東京→京都	11:40発	汽車	15日05:00着	
5月15日～20日	京都滞在				知人友人と交流、19日及第証書授与式、 20日大日本私立衛生会。
5月21日	京都→名古屋	16:00過ぎ	汽車	22:00過ぎ	青柳に投宿。
5月22日	名古屋→豊橋	午前発	汽車		新藤、鈴木を訪ふ
	豊橋→興津	13:36	汽車		興津海心亭に泊
5月23日	興津→東京 (新橋)	09:19発	汽車	4時頃	新橋停車場には井崎および車夫が迎えに出ていた

とがないのはふつうの慣習だったのであろう。この点、近藤復堂の京都への旅にも随行者があったのかどうか不明なのも同じである。

感想や意見の記述

この時期の中浜の旅行日記には感想や意見といったものはほとんど見られない。旅程や面会した人々等、事実の記録がほとんどである。旅行について感想があるのは、船車室内や旅宿の清潔について一二の記述があるくらい。船の大きいのに掃除が行き届いてない。この船はきれい、との感想。旅宿についての感想は、濃尾地震の一ノ宮での「蒲鉾の食い掛け」である。コレラ患者の発生した家を視察するときには、多くは下層階級とおぼしき貧家で、室内の乱雑・不潔に驚き、飲料水の取り扱いの不適を指摘し家人に清掃と町村役場の職員に消毒法の指示をしている。だが、これも患者家族にたいする憐憫というよりは感染の拡大を防ぐ職務上の観点からの感想であろう。

4 ── 父万次郎に随行した越後紀行

経路概要：東京（砂村）（明治 7〈1874〉年 7 月 30 日発）→高崎→温泉宿（猿ヶ京か）→三国峠（永井駅）→湯沢→長岡→新潟（8 月 3 日夕着、8 月 10 日まで滞在）→長岡→熊谷→東京（砂村）（8 月 15 日帰着、東京新潟間片道 5 日）［旅程表 4］

明治 7 年（1874）、東一郎 17 歳の夏、父万次郎が新潟の平野氏に面会の用があって旅行し、東一郎はそれに随行した。

旅程表4　明治7年（1874年）7月30日～8月15日　越後紀行

月　日	発着地/滞在地	出発日時	交通手段/宿	到着日時	経由地その他
7月30日	東京（砂村）→高崎	02:30発	人力車	夜更	父万次郎は乗合馬車、高崎泊。
7月31日	高崎→温泉宿（猿ヶ京か）	04:00発	人力車、徒歩、乗馬		渋川から徒歩、横堀から馬、万次郎は山駕篭
8月 1日	温泉宿→三国峠→湯沢	03:00発	馬		三国峠越え。
8月 2日	湯沢→六日町→長岡	02:30発	馬、乗合船	19:30着	益屋泊。
8月 3日	長岡→新潟	払暁発	便船	夕方	平野氏に面会、町を散策。
8月 3日～10日	新潟滞在				町を散策、平野氏に面会、10日「数日の論談決定せり」。
8月10日～11日	新潟→長岡	10日深夜発	乗馬		落馬して頭を打った。長岡泊。
8月12日～14日	長岡→熊谷	12日出発		14日夕方	この間、行程の詳細不明
8月15日	熊谷→東京（砂村）			朝	今朝両国橋畔より小舟に打ち乗り砂村へぞ着しける

神田万世橋から高崎への乗合馬車の切符が一枚しか買えなかったため、父万次郎が馬車、東一郎は人力車二人挽き。午前2時30分に砂村の自宅を出発、中山道を通り板橋で払暁、桶川11時20分、車夫が食事。6人乗り馬車の父が追いついてきたのでともに昼食をとる。夜更けに高崎に着き、柏屋に泊。31日、午前4時人力車にて高崎出発。途中人力車を継立て、9時頃渋川着。ここから坂道となるので人力車は無理なため、人夫に行李を担わせ、歩行する。横堀から東一郎は乗馬、父は山駕篭。温泉宿（猿ヶ京温泉か）に宿泊。ウナギが名物だというので注文したが、生臭くて食えなかった。8月1日、未明に起床、3時出発。馬を雇い三国峠（永井駅）を越えて湯沢に泊。8月2日午前2時半馬で出発。未明に塩崎（塩沢か）、1里で六日町。9時40分乗合船に乗船、13里下って信濃川と合流、午後7時30分長岡に着、益屋に泊。8月3日払暁出発。便船で夕方新潟に到着した。東京から丸5日の旅であった。8月10日まで新潟に滞在し、面会目的の平野氏と数回会う。その他は町を見物して歩いた。10日「論談決定せり」、夜12時頃に平野氏から「ツラベリングエキスペンス（旅費）を送りたるゆえ」即刻出発した。父万次郎はなんらか旅費を支給される用事で新潟まで来たのであろう[4)]。

往路に川船で下った道の復路は馬で、8月11日長岡まで。この日落馬して一時気絶した。8月12日左耳と腰の痛みを抱えて馬上で出立。13日晴れときどき雨、14日夕方熊谷に着。8月15日東京に帰着した。帰りも丸5日を要した旅行であった。

鉄道時代以前の陸路の旅行は馬車、人力車、駕篭、乗馬、徒歩などたいへん移動速度の遅い手段しかなかった。川船で川を下るのだけは快速だが、脊梁山脈を越える旅では、復路は登りとなるのでやはり容易な旅ではなかったことがよく分かる。また、朝の出立は、まさに「お江戸日本橋七つ立ち」の唄のとおり、たいてい2時〜3時頃の未明の出発である。これは夕暮れ前にゆとりを持って安全に目的地に到達するための、鉄道時代以前の旅の合理的な時間配分であった。

―― おわりに

旅日記というと巡礼や観光を思い浮かべるが、本稿で紹介した中浜東一郎の公務出張や岡山の近藤復堂のようなビジネス旅行も、かつての時代にも少なくなかったであろう。むしろ旅行者の数はなんらかの実践的な用務を帯びた旅行のほうが多かったかと思われる。その場合必ずしも余裕のある旅ではないために、旅日記も旅の情緒や感性的な印象を記した日記にはならず、行程や諸費用や業務を書

4）中浜東一郎著『中浜万次郎伝』（冨山房、1936）にはこの旅行のことは記述がないので用向きはわからない。ちなみにその翌年の⑤の土佐中ノ浜への帰省については同書の397〜403頁に記述がある。

き付けたメモランダム的な記録になるので、現代の人々からあまり着目されないのかもしれない。しかしそれであっても、あるいはそれゆえにこそ、現代も多くのビジネスマンたちが行なっているしごと旅行のスタイルを、交通手段などのその時代の社会的手段を駆使して実行しているところが見てとれよう。本稿は明治期の官僚が公務出張でどのような旅行をしていたのか、その一例を垣間見たものである。

［うちだ　まさお］